

# 中皮腫治療への思い = 大島秀利

大島秀利 | オピニオン | 速報

毎日新聞 | 2025/7/4 06:00 (最終更新 7/4 06:00) | 有料記事 1695文字



中皮腫の治療研究支援への思いを語る中川和彦・近畿大学特任教授 = 大阪狭山市の同大学病院で2025年6月27日午前11時59分、大島秀利撮影

主にアスベスト（石綿）を吸い込むことによって発症する石綿関連がん「中皮腫」は、国内で年間約1600人の命を奪っている。職場や暮らしの中で石綿が飛び交う環境の影響と考えると、「社会がもたらしたがん」の側面が強い。一方、治療薬の開発は進んでいない。

中皮腫が注目されたきっかけは2005年6月末、旧石綿製品工場（兵庫県尼崎市）周辺で住民に中皮腫が多発した「アスベスト公害」が発覚したことだった。

以降、患者の治療や療養の費用を支給する石綿健康被害救済法が施行され、尼崎市以外でも周辺環境を汚染した企業が住民への補償制度を設けるケースも相次いだ。また、訴訟によって原告患者が国や企業から賠償を受けてきた。

しかし、患者たちは「希望がほしい」と願ってきた。希望とは、治療薬の開発を指す。その思いに応えようと、患者や医師、弁護士、支援者らの寄付で生まれた「中皮腫治療推進基金」が公害発覚から20年となった今年、研究への助成を開始した。

中皮腫は、肺などの臓器を覆う膜にできる希少がん。20～60年の潜伏期間を経て発症し急激に進行する。かつて多くの患者は「余命1、2年」と医師から告げられることが多かった。近年は他のがんを念頭に開発された延命薬が登場。中皮腫患者に適用される薬もあるが、効果が限定的だったり、なくなったりして抜本的な症状改善につながっていない課題があった。

さらに、製薬会社が開発費などの採算面から、患者の多い病気の治療薬開発には力を入れても、中皮腫のように患者が少ないがんへの開発意欲が低いという問題もあった。

「なんとか中皮腫の治療薬の開発を」と自ら奔走した患者たちがいた。その一人が約8年の闘病後昨年3月に59歳で死亡した大阪府岬町の元郵便局員、右田孝雄さんだ。

右田さんは「中皮腫サポートキャラバン隊」を17年に結成し、患者同士で励まし合い、治療の情報を伝えた。年間10万人以上が発症する肺がんの患者団体メンバーらの助言を受けながら、医師や製薬会社との人脈を築いた。そして、基金の設立構想ができた。

強く依頼されて代表理事に就任したのは、肺がんの治療研究で実績がある近畿大学病院がんセンター長の中川和彦特任教授（68）だった。なぜ簡単ではない役割を引き受けたのか。

中川さんによると、肺がんの治療は1990年代は成功例が出なかったが、この25年間で試行錯誤を重ねて臨床研究を続ける中で治療が発展したという。その一つが、新たな発想の治療薬「分子標的薬」の開発だった。一つの遺伝子異常で肺がんを発症するメカニズムが既に複数知られ、まずはどの遺伝子異常が患者にあるか特定し、その異常で働く分子を狙い撃ちして阻害する薬だ。

「肺がん治療は非常に苦しい状況から見事に発展してきた。いま、中皮腫での見通しは明るいとはいえず、かつての肺がんの状況のようだ。自分なりの経験を役立てることができるのではと思いました」



寄付などの支援を呼び掛ける「中皮腫治療推進基金」のホームページ

さらに、一医師としての思いもある。「医師を支えてくれるのは第一に患者で、医師として生きていく力の源だから」と語る。がん治療は新しい治療法を試みても失敗し、また挑戦して失敗する連続だが、それでも患者は感謝してくれる。「じゃあ、やっぱり頑張らなければ」というエネルギーをもらえるという。

基金は22年の設立以来、これまでに5000万円の寄付が集まった。日本石綿・中皮腫学会を中心に審査員を選び、今年3月に一つの臨床研究と、四つの基礎研究などに計約1400万円を助成した。

臨床試験を実施するには少なくとも3億円は必要になるという。助成について、中川さんは「大きな一歩。これで研究者に基金が知られ、学会ともコラボできた。これを機会に多くの国民に知ってもらい、支援の輪を広げたい。政府からも支援を得られれば、大きな力になる」と期待している。

中皮腫治療推進基金のウェブサイトは、<https://www.mesothelioma-fund.com/>。電話は、0495・71・6611。【大阪編集局・大島秀利】